

音の魔力

Magical power of sound

浅田まり子 (Mariko ASADA)

1. はじめに

音の魔力につながる昔話には、ドイツの「ハーメルンの笛吹き」や、タルティーニの「悪魔のトリル」の作曲の経緯があるが、辿ってみれば、現在でも形を変えて起こりうる話である。「ハーメルンの笛吹き」では笛吹の音色が、ペストを運ぶネズミ達を、一斉に河へ引き込み溺れさせて退治をしたが、その村民はその笛の音の力を信じずに、報酬を払わなかった。その報復として、笛吹が今度は別の音色によって、村の子どもたちを誘い、村から子どもたちが全部いなくなったというお話であるが、いろいろと調べているうちに更にその先の話が続いていた。これは報復のために、より誘惑的な笛の音で、子ども達を誘いだし、河に誘い沈ませたとも、集団誘拐等の様々な説があることが分かった。また、作曲家タルティーニは心を悪魔に売って、誰も考えないような作曲をしたという内容もあったが、恐らく、現在でいう悪魔（薬物等）によって甘美な世界を夢見、素晴らしい作曲をした・・とも考えられるし、現在でもそのような事例が多々あることは事実だ。ただ技術的に素晴らしくできあがった曲はタルティーニ自身が弾けず、後にリストと並ぶヴァイオリンの超技巧の持ち主パガニーニが弾いてしまったという話もある。

人間探究の授業の中で、「悪魔のトリル」の話をしたところ、「トリルとは？」と聞かれ、近くにあるピアノで、これがトリルだと弾いてみたところ、一部で「ホ～」というため息が聴こえた。彼らにとってトリルは未知の音であったに違いない。また、今では卒業式・入学式のオーケストラ演奏が恒例となっているが、学園 100 周年記念時、北爪道夫先生に作曲していただいたファンファーレを含む大学歌・愛知淑徳学園祝典序曲などの演奏の練習を学生たちと始めたときには、かなりの難しさもあったが、せっかく作曲をしていただいた学園の大切な曲を繋げていきたい思いがあった。練習する音も、式で演奏するときも、教職員の方々にも、いったい何が始まったかと思われ、「すごいですね！」と言われた。また入学式に「初めてオーケストラを見た。感動した！」と伝えてくれた学生もいた。毎年、演奏後にその年の反省しながらも繋げてきた筆者にとっても、続けてきて良かったと思うし、それも音の持つ魔力であると考えている。

本論では 2 つの目的を持つ。1 つ目は有名なクラシックの音楽家のさまざまな生涯を知り、彼らがどのような音の魔力を生み出したのかを探究をすること、2 つ目は学生生活に起こり得ることから、魔力とは何かを探究してほしいと考えている。

イタリア歌曲に、「Vittoria! Vittoria! (勝利だ！勝利だ！)」という歌曲があるが、戦争で勝利した歌かと思えば、実は失恋の歌であり、彼女にふられて自分があれこれ悩むこと

はなくなったから、自分の心は自由になり「勝利だ！」と歌っているのだと聞いたことがある。表面だけでなく、そこに隠れた多くの意味が存在するのである。

1・バロック時代

バロック時代(1600～1750)の歴史上の背景として、前半はドイツの30年戦争が起こり、宗教と、政治の問題からの戦争があった。後半にはフランス・ルイ14世の豪華な文化が影響した。バロック音楽の特色としては大きな規模の作曲がされ、全てにおいて豪華で明白な対照を持ち、今まで、声楽が主であったのに対し、器楽が対等な位置にあった。上流階級が関心を持ち、世俗音楽が、宗教音楽よりも盛んになり、宗教以外の世界から大きな影響を受けた時代であった。¹

—ここではHändelとBachの生涯を比較してみることにする。この2人は同じ年、1685年に生まれている。Händelは2月23日であり、Bachは3月21日(または31日)と記してある。一応1か月ほど、Händelが早く生まれているので、Händelからその生い立ちをたどっていく。

(1) Georg Friedrich Händel (1685年2月23日～1759年4月14日 74歳)

ドイツ、ザクセン地方ハレ(当時は神聖ローマ帝国)にバッハとは対照的なブルジョアの家に生まれた。父子は同名で、父の名もGeorg Handelで(1622～1697)ザクセン宮廷のアウグスト大公の侍医であり、有名な外科医、そして大公専属の理髪師だった。外科医であるこの父は医学を学んだ先生の未亡人を妻にもらって11人の子ができたが、1682年、妻に先立たれ、63歳の時に、30歳も若い後妻をむかえ、このHändelが誕生した。彼は幼い時から音楽の才能に恵まれていたが、厳格な父は法律家になろうとしたため、音楽をすることは許されず、彼は夜、密かに屋根裏部屋にのぼり、クラヴィーアを、月の光で練習したと伝えられている。

父は12歳の時に亡くなり、思うような音楽に精進することができたのはそれからであった。18歳の時、ハンブルグに行き、ヴァイオリンを弾きながら作曲をし、成功を取めた。しかし職を得るには前任者の年上の娘を妻にしなければならない条件であり、その職に就くことはなかった。²

～このようなケースは当時にはよくあることだった。音楽家の後任を探すのに、その故音楽家の未亡人とか、師の娘と結婚することが条件にされていたことが多く、ヘンデルだけでなく、バッハもその条件での就職を断り、この地を後にしている～

それからは、イタリアに渡りメディチ公の後援を得て、作曲したオペラはそこで初演された。ロンドンではアン王女から優遇を受け、またイギリスの社会は産業革命の一手手前であり経済的に活気があり、ヘンデルは意欲を十分に発揮できた。オペラ「リナルド」は1711年初演し、絶賛された。この年の6月に一旦ハノーファーに帰ったが、華やかな生活が忘れられず、翌年11月ロンドンに戻り、アン王女から寵愛を受けていたのだが、1714年アン王女が急死、9月にハノーファーのゲオルク・ルートヴィッヒ公がイギリスのジョージI世となり、そのジョージI世ために「水上の音楽」が作曲された。1719年のはじめ、貴族たちの発起で、株式組織の

オペラ会社ロイヤルアカデミーを創立し、順調であったが、ロンドンに「乞食オペラ」(Beggars' Opera) が起こり、当時流行した音楽で、芸術性のない一般の興味だけを狙ったものだが、ヘンデルは破産に追い込まれ、健康を害し、転地が必要となった。³

ヘンデルは 1741 年 11 月にアイルランドのダブリンに招待を受けた。慈善の演奏会を行う「フィルハーモニック協会」があり、夏に作曲した「メサイア」(救世主)を翌年 4 月に初演し、大成功であったため、完全に失意を取り戻すことができた。また「メサイア」ロンドンの初演時に第 2 部の最後に歌われる「ハレルヤ」では、国王ジョージ 2 世はこの歌を聴き、思わず起立したと伝えられ、その習慣が今でも一部で残っている。1748 年イギリスも参加していたオーストリアの王位継承権戦争が終わりを告げてアーヘン条約がむすばれた祝いの祭典ため、作曲された「王宮の花火の音楽」はロンドンで、100 人以上の大編成で初演された。ヘンデルは晩年目を患い、1750 年から緑内障になり、名医の手術もむなしく、失明してしまった。この医者はバッハの目も手術をしたが、どちらも成功はしなかった。⁴

～Händel が 34 年間住んでいた家はロンドンの Brook Street に残っていて、筆者も見学してきたことがあるが、豪邸でもなく、普通の家屋で、今も若い音楽家たちがコンサートを開いている。～

Händel は 1726 年イギリスに帰化をして 1759 年この世を去ったが、国葬となり、「死を悼む会葬者は 3000 人を超えた。ウェストミンスター・アビに安置。音楽家の墓としては極めて名誉なことで、イギリス最高の歴史的に偉大な人たちが葬られるところである。⁵

(2) Johann Sebastian Bach (1685 年 3 月 21 日 (31 日とも記している書もある) ～ 1750 年 7 月 28 日)

Bach はドイツ・バロック音楽最後の最大の作曲家であり、その完成者である。Händel と同じ年、同じ国に生れたが、Händel がイタリア、イギリスなど国際的に活躍したのと対照的に、Bach は一生ドイツ国内にとどまりドイツ精神に徹した。

16 世紀のころから中央ドイツのテューリンゲン地方にはバッハ家出身の音楽家が非常に多かった。教会のオルガン奏者、作曲家、宮廷や役所勤めの音楽家で、約 300 年の間、7 代バッハの姓を持つ音楽家が 60 人～100 人近くもいたという。

父ヨハン・アンブロジウスは 1645 年エールフルートに生まれ、この父は双子児であり、バッハはこのアンブロジウスの末の子でテューリンゲンのアイゼナッハに生まれた(当時は神聖ローマ帝国)。アイゼナッハは宮廷都市で、町のはずれにあるヴァルトブルグ城はマルティン・ルターが破門され、宗教改革の想を練ったところともいわれ、また、ワーグナーのオペラ「タンホイザー」の舞台になったことで知られている。そしてバッハ博物館もあり、父の肖像画、当時の楽器の陳列がみられる。父は母との縁で、アイゼナッハに来て、アイゼナッハ公の楽師となった。8 人の子供のうち、4 人までが音楽家となった。Bach は 1692 年から 3 年間、アイゼナッハのラテン学校で、基礎教育を受けたところは、マルティン・ルターが 200 年前に通っていた学校でもある。⁶

～筆者がアイゼナッハに到着時に、まずはホテルの前に見えたのはルターの大木のように聳え立つ銅像であった。その像を見たら、すぐルターだと感じ、それがどのように関わっているかが徐々に分かった。ヴァルトブルグ城では、幽閉されていたという細い小さな部屋であったが、日々、新約聖書をドイツ語に訳して過ごしていたのだ。バッハも同じように、城主に幽閉された折、平均律を 24 の全調で 48 曲、作曲していったという。志さえあれば、どのような環境になるとしても、気持ちを切り替えさえすれば、自分のために生きられるという「生きる力」を垣間見た～

Bach は 10 歳の時、母に次いで父も亡くなり当時 24 歳の兄ヨハン・クリストフ(1671~1721)に引き取られた。兄はヨハン・パッフェルベル(1653~1706)にオルガンを学んだ才能ある音楽家であった。Bach はラテン学校に通いながら聖歌隊で歌い、様々なところに出張し歌い施しを受け、決して暮らしは楽ではなかった。その後、リューネブルグ(1700~03)へ給費学生としていき、聖歌隊としての務めを続けながら、勉学に励んだ。ここではたびたびツェレまで足を運び、フランス風のオペラや、オーケストラの音楽に触れた。16 歳の時、45 キロも徒歩でオルガンの大家・ラインケンを何回も聴きに行ったそうである。アルンシュタット(1703~05)、ミュールハウゼン(1707~08)、ワイマル(1708~17)、ケーテン(1717~23)、ライプチヒ(1723~50)の地で、教会作曲家、オルガン奏者を務め時代を超越する多くの作品を残した。⁷

22 歳の時、1 歳上のマリア・バルバラと結婚し、36 年間連れ添い 7 人の子を持ち、そのうち、2 人は音楽家となった。また、マリアが亡くなった後、15 歳年下の歌手アンナ・マグダレーナと再婚して 13 人の子を得、やはり、2 人が音楽家となった。ライプチヒを選んだのはライプチヒには有名な大学があったので、子供たちの教育を考えてのことだった。教会とトーマス学校に最後の 27 年間勤めた。多くの優れた作品を残した、ドイツ・バロックの偉大な作曲家である。Händel は同じ年にドイツで生まれ、イタリア、イギリスなどに活躍したが、バッハは一生ドイツ国内にとどまって作曲をした。Händel とは 2 度ほど会う機会があったはずだが、一度も会えなかった。糖尿病が原因で、白内障になり、2 度手術を受けるが失敗に終わり、失明。65 歳でマグダレーナに付き添われ生涯を終える。はじめは代々の墓に埋められていたが、現在はライプチヒのトーマス教会に眠っている。⁸

～同じバロック時代に生まれたこの 2 人の生涯は対照的である。Händel の作品は 600 曲以上になり、その中にはイタリア・オペラを中心とする約 40 曲、英語による宗教的劇音楽「オラトリオ」30 曲が含まれており、内容はオペラもオラトリオも大衆に人気のあった華やかな劇的声楽作品であった。ハノーファー出身のジョージ I 世に尽くすため、イギリスに帰化している。一方、Bach の方はルターの理念に基づいた宗教音楽を数限りなく作曲をし、毎週、ミサのために作曲→練習→ミサ本番という仕事を続けたことも並外れた技でもあるし、作品は BWV という番号が付けられ、1128 番までついているという。また、Bach は大家族を持ち、働き、その上、子供の教育にも熱心であった。「インベンションとシンフォニア」「平均律」などは自分の子どもたちに作曲し、若い後妻のために「アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帳」や、フランス組曲などが作曲されている。音楽に関しては完璧を極め、楽

譜を見てもわかるように、精密機械の設計図のような、計算された音符が並んでいる。「マタイ受難曲」の楽譜を見ても、その場面に相応しい表現の音符の数々を見つけることができる。そして、その後の音楽家、現在の音楽家にも限らない音楽の道を示している。～

まさに **Beethoven** が、「**Bach** は小川 (**Bach** はドイツ語で小川という意味である) ではない、大海だ」⁹といった意味がよくわかる。

2・古典派(1750～1820)

この時代背景は、フランス革命とナポレオン戦争が起こったことである。フランス革命で主張された民主主義の精神に中層階級、下層階級が抬頭してきた。

18世紀の初期は古典主義、18世紀の後期古典主義は区別してウィーン古典派と呼ばれ、ウィーンが当時のヨーロッパ音楽の中心都市だった。近代ソナタ形式はこの時代である。旋律ははっきりと、正確で簡素な性格を持ち、上品で、洗練された特徴を持った。和声の複雑さ、巧妙さは **Bach** の作品に比べ、**Beethoven** の時代まで、和声法の発展は見られず、主要3和音、7の和音は少しばかり使用されただけであった。フレーズはバロック時代よりは短く、規則的になっていて、近代の管弦楽法など、基礎が確立され、バロック時代の鍵盤楽器よりも音量があるピアノが発明され、後期に発展した。¹⁰

(1) Wolfgang Amadeus Mozart (1756年1月27日～1791年12月5日)

現在はオーストリアではあるが、当時は「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」であるザルツブルグに生まれ、36年足らずの短い生涯をウィーンで閉じたが、言葉通り神童であり天才型の作曲家であった。彼の **K.1** (作品番号) のピアノ曲が、6歳を終えたばかりの子供の時の作品であり、第1交響曲 **K.16** は、8歳を終える頃の旅の上の作品だった。イタリア全土、パリ、ロンドン、ベルギー、オランダ、ベルリンなど、ヨーロッパ全土を歩きながら、旅の上で育ち、旅の上で仕事をしたが、最後の10年間はウィーンに定住してハイドン、ベートーヴェンと共に、古典主義音楽を完成した。¹¹

彼の父レオポルト・モーツアルト (1719～1787) はアウスブルグの貧しい製本屋に生まれたが、楽才と声が美しかったので、子供のころから教会で合唱をしていた。18歳の時、ザルツブルグ大学に入るため、この地に来てここで終生暮らし、大司教宮廷の楽団のヴァイオリン奏者で、副指揮者にもなったが、現在でも活用されている「ヴァイオリン奏法」の本など残し、優れた音楽教育家としても知られている。まして神童アマデウスには各国の最高の師のところまで学ばせ、アマデウスの音楽教育に全力を尽くしていたに違いない。たとえ神童といえども、良い環境、よい師となる人間に出会えなければ、天才作曲家とは成り得ないと考える。母アンナ・マリア (1720～1778) はザルツブルグ近くの村で生まれ、4歳で父を失い、母とザルツブルグに移って暮らし、1747年レオポルトと結婚し、7人の子供が生まれたが、姉のナンネルと、アマデウスだけが無事成長した。¹²

マリア・テレジアの午前演奏の時、転んでしまった6歳のアマデウスは7歳のマリー・アン

トワネットに起こしてもらい、「お嫁さんにしてあげる」と言ったとかのエピソードもある。7歳でピアノ曲、8歳で交響曲を旅行中作曲、まして14歳の時にローマにあるミケランジェロの壁画で有名なシスティーナ教会で、アレグリ（1582～1652）の門外不出の秘曲を聴いただけで覚えてしまい楽譜に書いてしまったという有名な話もある。それは5声部のI合唱と、4声部のII合唱が交互にア・カペラで歌い、最後は9声部の合唱となるものである。天才ではあるが、和声を学んでいたからこそ、そのような聴き取りが容易にできたのだとも考えられる。

Amadeus Mozart は 1777 年、ザルツブルグからミュンヘン、マンハイムに移り、マンハイム楽派の影響を受ける。音楽家の父を持つアロイジア・ウエーバーと出会う。Amadeus の父は猛烈に反対し、1778 年 2 月パリ行きを命じ、絶賛を受けるが、報酬は少なかった。交響曲 31 番「パリ」を作曲したが、同行した母が、7 月にパリで亡くなった。

1781 年 3 月 25 歳のアマデウスはザルツブルグ大司教コロレドの命令で、ミュンヘンからウィーンに移り、そこで、アロイジアの妹コンスタンツェと 1782 年父の反対を押し切り、結婚した。作曲家カール・マリア・フォン・ウエーバーの従姉である。2 人の間には 4 人の子が生まれたが、遺児は 2 人で、1 人は音楽家になっている。

1786 年 5 月「フィガロの結婚」初演、1787 年 5 月父レオポルトが、死去。8 月アイネ・クライネ・ナハトムジーク作曲。10 月「ドン・ジョバンニ」初演。以後、900 曲以上の作品を残した。晩年は品行も悪く、そのための弊害による評判で、収入が激減したが作曲は続ける。葬儀は共同墓地で寂しい弔いであったらしい。

短い生涯といえば、Schubert も 1797 年～1828 年（31 歳）の生涯である。Beethoven を尊敬し、遺言により、Beethoven の隣の墓に眠っている。父親は教師で、教師にさせることが夢であったが、Schubert は作曲家として 600 曲以上も書いて残した。生涯、家も持たず、ピアノも持ったことがないという。友達が多く、毎晩のように飲みながら作曲をしたという点では、Amadeus に似ているかもしれない。

ザルツブルグの Amadeus の家に筆者が訪れた時、思ったことは、小柄な人だということが推測できた。というのも、実際にベッドが小さかったからだ。それに付随して体も丈夫ではなかったようである。次から次とくる作曲等の依頼が、命を短くすることになったのではと考える。また、映画「アマデウス」では表現が下品であるからと嫌う人がいるが、全体的に見れば、当時のアマデウスの環境はその様子が事実無根ではなく理解する余地はある。特に、作曲をする場面においては、作曲される経緯が誰にでも理解できる描写であった。

死因については 1991 年 4 月 10 日の中日新聞（夕刊）に次のように書かれていたのを思い出した。現在社会でよく問題にされている過労死の状況である。Mozart の死因についての新説をケンブリッジのヒンチン・ブルーク病院のマリー・ホーター博士が王立医学雑誌に発表した。「死の直前の Mozart は頭痛、視覚喪失、うつ病に絶えず苦しみ、死の予感と、毒を盛られたという幻覚に襲われ、腹痛、吐き気、下痢、体重喪失などの症状にも苦しんでいた。こうした症状はすべて腎臓疾患が原因で、起こるもので、その結果、死の前年の 1790 年から高血圧と、尿毒症が悪化、最終的に気管支炎と、肺炎を併発、Mozart の命を奪った。」と結論付け

ている。1780年から死の1791年の10年間、旺盛な創作活動を行い、300以上の曲を作曲、数多くの傑作を残した。また、演奏、指揮、教育活動も精力的にこなした。しかし、生活は不規則で、夜中の2時まで作曲して、明け方4時には起きてまた作曲に取り掛かることもザラだったという。こうした不規則な生活、慢性的疲労、睡眠不足が彼の健康状態を悪化させ、腎臓疾患をもたらしたらしい。また「アマデウス」で知られているサリエリの毒殺説は完全に否定されている。

(2) Ludwig van Beethoven (1770年12月16日~1827年3月26日)

祖父(Ludwig van Beethoven1712~1773)が、ベートーベン家が音楽家となった最初の人となり、彼はベルギーで生まれ、ボンに来てからは選挙侯宮廷の宮廷歌手の称号を与えられ、1761年に楽長となった。ルートヴィッヒの名が、そのまま孫に引き継がれている。¹³

Beethovenはライン河畔のボンに生れたが、彼の父はいつも酒におぼれ、テノールの歌唱者で、母は召使い階級の婦人で再婚者である。子供時代はMozartのような家庭的な雰囲気はなかった。父は彼の音楽の才を利用して神童の看板をくっつけ、子供を食べ物にしようとした。4歳となると、父は日に数時間も、むりやりにクラヴサンを弾かせたりヴァイオリンを持たせ、1室に閉じ込めたり、暴力も用い、過度な音楽の勉強を強いた。11歳でオーケストラの一員、13歳でオルガン弾き。その後、母は亡くなり17歳で一家の主となり、2人の弟の教育の債務を負い、酒飲みの父を引退させた。¹⁴

BeethovenはMozartを崇拝していたが、ウィーン行きが実現した時にはMozartは死んでいたのので、Haydnと出会い、ウィーンではHaydnに師事した。またウィーンに移って約20年間は貴族社会と関係が深く生活が保障されたが、フランス革命後零落し関係が立たれる一方、ルードルフ大公(Erzherzog Rudolf von Österreich (1778~1831))だけは、ベートーベンの唯一の作曲の弟子として、最後まで友情が続き、多くの作品が大公に捧げられ、1792年2度目のウィーンに行ったまま、35年余り、後半生をウィーンで過ごした。¹⁵

30歳にもならない前から難聴症が始まった。これを秘して治療につとめたが、効き目がなく、ハイリゲンシュタットを医者に進められ、そこで暮らすようになったが、不治の病を悲観し、「ハイリゲシュタットの遺書」を書いた。これは、彼の死後25年もして出てきた。

創作の旺盛な時期は1805年を中心として4~5年であった。交響曲：英雄・運命・田園等、ソナタ：ワルトシュタイン、熱情、クロイツェル等、他：協奏曲、オペラなど。1810年を過ぎると支援していた貴族は減り、耳はますます聞こえなくなったが、1812年、ゲーテにあったこと、1814年ウィーンでナポレオン戦争の終結としてウィーン会議が開かれたとき、各国の王公、使臣の前で、彼の多くの作品が演奏されたことは大きな喜びであった。1827年3月26日にこの世を去った。20,000人の市民が集まったという。¹⁶

～共同墓地に家族のみが見守るMozartの葬儀とは対照的な葬儀であると考えられる。生まれたときには暖かい家族で育てられたMozartだが、寂しい結末であった。しかし、Beethovenは冷たく厳しい幼少時代を送っているが、最後は多くの人に見守られていた葬儀だった。～

3. ロマン派 (1820~1900)

19世紀の戦争はクリミア戦争(1854~1856)、南北戦争(米)(1861~1865)、普仏戦争(1870)が起こった。また産業革命によって社会的経済的な問題や、資本主義と社会主義の発生をもたらした。

音楽の特徴として人間的な感情の表現が歌曲と、オペラに特にみられ、作曲家の様式は個人主義的な自由なものとなり、器楽は大きく拡張され、民族固有の様式も育成された。標題音楽も他の時代よりも多く、ピアノなどの器楽演奏、作曲に妙技の大家が現れ、その中心はドイツ、オーストリアであった。¹⁷

(1) Robert Alexander Schumann (1810~1856)

Schumann はドイツロマン主義時代の最大作曲家の一人である。彼の父は文学を志して著述と出版を業とした人であった。Robert の楽才は母親からの遺伝だとされているが、彼の音楽が文学に通じる面と、彼が評論の面に大きな功績を残したのは、この父親からの影響だとみられている。彼は 40 年余りの生涯を一時的な国外旅行の他、ドイツ国内で終始したが、それは苦難に満ちたものであった。¹⁸

Schumann は 9 歳半で中学校に入り、自宅が出版社で、書架に文学書が多かったので、スコット、バイロンを読み、中でもジャン・パウロに心酔した。中学時代に書いた詩、劇、小説も若干あり、詩の朗読が好きであった。そしてピアノを弾き、作曲することが日課であった。彼は、この時から文才と楽才を同時に表した。¹⁹

進路に迷い続けていたが、母に法律家になることをあきらめてもらい、ライプチヒに帰って、音楽を専門にすることに決めた。過度の練習から指をこわしてしまい、ピアニストになることは断念、作曲を続けながら、同志と集まって音楽を論じ、1834 年に創刊した音楽雑誌“Zeitschrift für Musik”で、無名の Chopin を発見し、「諸君この天才の前に帽子を脱げ」と称賛し、若い Brahms を「若き血ヨハネス・ブラームス」として紹介したことは、預言的な批評としてあまりにも有名である。²⁰

Schuman はピアノの師ヴィークの娘クララとの親しい友情は、熱烈な恋に変わり、結婚へと発展したが、ヴィークは絶対に許そうとはしなかった。最後の手段としてライプチヒの裁判所に訴訟を提起し、1840 年 9 月 12 日に裁判は Schuman の主張が受けいれられて、クララが、21 歳になる前日にシェーネフェルトの教会でささやかな式を挙げて結婚した。²¹

1850 年 Schumann 一家はドレスデンを引き払ってデュッセルドルフに移った。市立のオーケストラの常任指揮者になり、年 10 回の定期演奏会、4 回の教会音楽の指揮で年給が払われ、住宅も与えられ、クララとシューマンは離れて部屋を取り、気兼ねなくピアノを練習できたという。時折音楽家たちを招き、ハウスコンサートを開いた。交響曲「ライン」ほか、チェロ協奏曲など重要な作曲がされ、ブラームスの才能を発見して記事を書いて送ったのもここであった。²²

ドレスデン時代から不眠症に悩まされていたが、デュッセルドルフに来て、管弦楽団との間

がうまくいかず、それが原因ともなって精神に異常をきたした。彼は投身する数日前に Schubert から主題をもらって変奏曲をしているのだと言っていた。2月27日（1856年）に彼は家人に無断で家を飛び出し、ライン河の橋の上から身を投げた。幸い船人に助けられ、自宅に運ばれたが、彼は自分のしたことに対して弁解することもなく、自分のやりかけた作曲を続けたという。その後、彼は精神病院に入れられて2年半ほど療養したが、1856年7月29日寂しくこの世を去った。クララは Schuman の死後、7人の子どもと、40年も生き抜き、1896年5月20日フランクフルトで77歳の生涯を終えたが、ヨアヒム、ブラームスと親交を続け、彼女の芸術を全うすることができた。²³

(2) Franz Liszt (1811～1886)

ハンガリーに生まれて、ウィーンでチェルニーについてピアノを学び、若いうちはパリを中心にヨーロッパ全土を征服してピアノの王者となった。だが、晩年は宗門に入って、神父の黒衣をまといワイマルに定住して500人以上の後進を育てる一方、苦境にあったワーグナーや、ベルリオーズを助けて、ロマン主義の世界を栄えさせた。若い頃にはピアノ作品が多いが、晩年は交響詩の分野に新しい範を示した。²⁴

父アダムは Franz の教育のために職を投げ打ち家財道具を売り払って、1822年ウィーンに行き、チェルニーにつかせて正式にピアノを習わせた。1823年4月13日にデビュー演奏した時には、ベートーベンも臨席し、その前途を祝福した。

リストのパリにおける新人巨匠時代、彼は才色兼備のダグー夫人と恋仲であったが、夫人は夫を捨て、旅先のジュネーブにリストを追った。それで2人はパリに帰れなくなり、同地の音楽院で教えながら、1835～36年を過ごした間に、長女ブランディーネが生まれた。（ダグー夫人との間に後コージマ、ダニエルがいる）²⁵

1838年から約10年間は、ヨーロッパ中を駆け歩いた巨匠時代であった。彼は無敵の名人であって、至るところ凱旋將軍のように迎えられた。1838年ブダペストが大洪水に見舞われたニュースをヴェネチアで知り、直ちに故国ハンガリーに向かったが、途中ウィーンで開いた演奏会は、次々に好評で、10回の演奏会での純益金、全額水害救済に献金した。そして1839年12月、ブダペストを訪れた時は演奏会の後に、タイマツ行列がホテルまで続いて、その熱狂と感激は言語に絶したという。この時の彼の演説はフランス語でなされ、友人によって通訳された。²⁶

1847年ロシア旅行でヴィットゲンシュタイン侯夫人と知り合った。夫人はその2年前から夫と別居生活をしていて、リストの信頼、尊敬の念は恋愛に変わり、結婚を目指して努力したが、宗教的な理由で認められず、居をワイマルに移して運動を続けた。ホテル住まいしていた List も、やがてアンテンプルグに入って同棲に移り、その努力はローマにまで展開されたが、結局は許されず、そのために夫人は修道院に入り、List も以来、神父の黒衣をまとって終生した。

1869年単独で、ローマを去り、ワイマルに帰ってきて、宮廷の園丁の舎宅だった家をもらっ

て入居した。以後 17 年間ここに住み、作曲し、後進を教え、世界中からの巡礼者を迎え、サロンでは音楽の夜会を開いていた。

List とダグー夫人との間に生まれた 3 人の子どものうち、1 人だけ生き残っていたコージマは、ワーグナーの妻となっていたので、晩年の List はパイロイトを訪れる必要があった。2 度目の訪問は、ワーグナーの死後 1886 年夏のパイロイト音楽祭の時、風邪から肺炎を起こし、世を去ってしまった。²⁷

～List の手は指が細めで長く、10 度の音程を普通の人がオクターブを弾くような楽しさで弾いたという。晩年の手のブロンズがワイマルのリスト博物館にあり、筆者も実際、見たことがあるが、オクターブを図ると、18.5 cm くらいなのが、23 cm 楽々に届いてしまうというのだから、手の大きさにも恵まれていたことがわかる。～

それ故に List は超技巧派の体現者として、その音楽はピアノの可能性を超越して、ピアノのみの演奏で、オーケストラで演奏しているような多くの音と表現可能な技術の持ち主であったのだ。²⁸

4. 音楽家の教育と生活

音楽家の生涯をバロックでは Händel と Bach について、古典派では Mozart と Beethoven、ロマン派では Schumann と List の様々な生涯を比較した。Händel はこの時代の親の目指す教育が法律家であり、音楽に専念することに時間がかかったが、生涯、家族は持たず、イタリア、イギリス、ドイツと国際人であり、世俗的な音楽が多かった。この点では Schuman の場合も音楽を目指すことを許されるまで、母親を説得するまでに時間がかかったことが類似している。その点、Bach は早く父を亡くして、兄に育てられたが、Bach 家は音楽家一族であり、迷うことなくドイツ国内で音楽の道をひたすら歩めた。家族が多く、20 人も子どもがいたので、その家族を養うことでも教会に勤め、宗教的な音楽が多いのと、子どもの教育のためにも Bach は精力的に作曲し続けた。以前、筆者が「Bach の旅」に出かけたとき、若いときの Bach の銅像が、晩年を過ごしたライプチヒのトーマス教会に勤めるまでの彼の銅像が見るたびに段々大きくなっていったのに気づき、興味深かった。それは年ごとに国内の存在が大きくなっていったことにも関係していると考えられる。また、Bach の末息子は Johann Christian Bach は Mozart とも仲が良く、多くの音楽家に影響を与えている。

Mozart は父が、音楽教育家であり、各国の有名な音楽の師を訪ねながら、Mozart にその理論と技術を習得させ、教育していった。父親が、当時ルソーの「エミール」を読んでいたという事実もある。果たして父親は Mozart をどのように育てたかったのだろうか。だが、Mozart は父の反対を押し切り、結婚し 2 人の子を得たが、その生活は決して裕福ではなく、Mozart の死後、妻は Mozart の曲を整理し、著作権料を得て、再婚もし、子どもを育てていた。

Beethoven は今でいう、父がアルコール依存症であったが、Mozart のような神童にしようと目論み、今でいう児童虐待をして、ピアノ等を強制的に練習させた。Beethoven は家族に恵まれず、父に代わって弟たちの面倒を見なければならなかったため、精神的な苦痛も多く、その上、聴力も失い、遺書も書いている。Beethoven は聴力を失ったが、頭の中は終始、情熱的

な音楽が流れていたに違いない。

以前、ウィーンのシェーンブルグ宮殿を訪れたとき、現在でも3階以上は部屋を貸しているということ聞いた。3階以上の部屋は、召使いの部屋であったとか。おそらく、音楽家なども常時その3階に住み、待機して暮らしていたに違いない。音楽家になるということは当時でも、収入が保障されない職業であったということも Händel、Schumann の例を見てもわかる。

Schuman は父が印刷会社をしていたということもあって文才もあり、やはり、法律の道を進められ、音楽をするまでには時間がかかった。特により技術を高めようと、当時流行っていた器具を使い、指を痛めてからは指揮、作曲、評論家として生きたが、本当は指を痛めてピアノが弾けなかったことが、一番辛かったのではないだろうか。なぜなら、Beethoven の時代からピアノ技術饗宴の時代であり、彼の妻のクララと、List は連弾して評判も良く、その時代は Chopin はじめ、Brahms も華やかなデビューをしている。自分の頭に湧いてくる曲を次々と自ら披露できるということは音楽家として最高であろう。この点でも、音楽家でも幼いときから音楽環境に恵まれているということは大切なことであったと考える。

Liszt は父親が家財を投げ打ってでも、ウィーンでよい師を選び、Cerny に師事を請い、その成果でまれにみる超技巧の才能にも恵まれた。「鉄は熱いうちに打て」とはこのことではないだろうか。Cerny はそのころ、Beethoven の曲を弾くための練習曲 Cerny30 番、40 番、50 番など作曲している。これは、ピアノを習った人はおなじみの練習曲で、練習すると不思議に指が動き、Beethoven の曲が弾きやすくなる。また Liszt の演奏会に関する漫画があるが、それを見る限りでは現在のジャニーズのライブの風景と変わらないような、特に女性の熱狂ぶりが描かれている。しかし、そのような華やかな生活をした半面、子どもに恵まれたが、結婚を考えた折、当時の宗教的な理由などから、結婚はどうしても許されず、相手の女性は修道院に入ってしまったため、晩年は Liszt も聖職に入り、後進の援助や指導をした。リストの子どもユージマはワーグナーの妻である。

こうした音楽家はどこかで皆繋がり、ドラマチックともいえる生涯を過ごした。時代は違うけれども、音楽家も私たちと同じ人間としての悩みを持ちながら生きてきたのである。まして、その時代は大陸の戦争がいつ起こるかもしれないような状況であった。誰もが人間として一生懸命生涯を生きていたことに変わりはない。音楽家の生涯にひよっとしたら、学生生活の自分の人生と似ているものが発見できるのではないだろうか。そのような期待をもって人間探究をしながら、道を究めたいろいろな人生を比較し、若い学生の生きるヒントとしたいと考えている。

5. 考察

現代社会には高齢化、少子化、そして、児童虐待が大きく取り上げられている。また、振り込め詐欺等今まで表面に出てこなかった犯罪の数々が、より巧妙な手口になってきている。それに加え、長時間労働・各ハラスメントも多く、問題となり、それにも増してまさに日本は「火の国・水の国」であり、火山噴火、地震・水害など未曾有の災害が続いている。このような現

代社会において、社会をよく知り深く読み取って自分自身を守ってもらいたいと考える。

本論は人間探究の講義を受け持った時に、考えたことである。学生からは「魔力は音楽だけでなく、どこにも潜んでいるのだということが分かった」という多くの反応があった。また、入学するとアルバイトをし、その自由さとお金が入ることで、つつい働きすぎて、疲れから試験近くなると入院をしたり、大学の単位を落としてしまったりという事態を多く見てきた。それと言葉巧みにその世界に誘われてしまい、よくよく考えるとブラックなものに引き込まれている場合もあった。従って、少しでもそれに釘を刺したい気持ちでもあったが、実際のところ、奨学金をもらっている学生、その上、自分で学費、生活費を稼がなければならない学生にとっては胸の痛む思いである。その他には自分を振り返り、「ゲームにはまり、多額を払わなければならなかったことがあった」等、「こんなことがあった、あんなこともあった」と思い当たることが書かれていて、そのようなことには、「ほどほどに自分を制御することも大事なことがわかった」と書かれていた。また、「音楽家のように自分が何かに打ち込めるものを見つけたい」とか、「大学では、社会にでる準備として勉強しなければ・・・」とか、「大学は通っていれば何とかかなるということではなく、勉強しなければいけないということが分かった」等々の反応があった。それと、「音楽史をこのように聞くことがなかったのでとても興味深かった」という感想もあった。

大学生として、「自ら考える（思考力）」「自ら決める（判断力）」「自分の意志を伝える（表現力）」を養うことが必要と考える。また、経済産業省が主催した有識者会議により、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な力を「社会人基礎力」（＝3つの能力・12の能力要素）」として定義した。

* 「前に踏み出す力（Action）」・・・一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力

主体性・働きかけ力・実行力

* 「考え抜く力（Thinking）」・・・疑問を持ち、考え抜く力

課題発見力・計画力・創造力

* 「チームで働く力（Team Work）」・・・多様な人々とともに、目標に向けて協力する力

発信力・傾聴力・柔軟力

情報把握力・規律性・ストレスコントロール力²⁹

以上のことを、心がけながら、大学時代をそれぞれにいろいろな経験を積み、現代社会に負けることのないような準備を整え、有意義に過ごしてほしい。

おわりに

今回、音楽家の生涯について深く興味を持てたのも、音楽史大図鑑が手元にあり、その執筆者が、属啓成先生であったことである。属先生は国立音楽大学で音楽形式学を授業で教えていただき、啓成先生の奥様である属澄江先生は高校2年生より筆者がピアノを教えていただいた恩師である。澄江先生にはピアノ奏法・そして筆者のピアノ音楽の扉を広く開いていただいた。また属啓成先生の音楽史大図鑑で、晩年の Liszt の写真³⁰の中に、Liszt が弟子たちと写っている

てその一人の先生が、澄江先生のウィーンで師事されていた先生であることが判明した。再度、音楽史を深く学びながら、筆者がヨーロッパを歩き回った際の記憶を辿り、先生ご夫妻への感謝の気持ちを込めながらこれを書くことができた。人はどこかで繋がっているのです、この繋がりを大切にしていきたい。

-
- 1 H.M.ミラー著 村井範子他訳 音楽史 昭和 43 年 3 月 東海大学出版社 p 77
 - 2 属啓成著 音楽史大図鑑 昭和 45 年第 1 刷 音楽之友社 72,74,75
 - 3 2 に同じ p 78~84
 - 4 2 に同じ p87
 - 5 2 に同じ p91
 - 6 2 に同じ p95,98
 - 7 2 に同じ p95
 - 8 2 に同じ p102,107,112
 - 9 久保田慶一著 西洋音楽史 100 エピソード 教育芸術社 p50
 - 10 1 に同じ p127~128
 - 11 2 に同じ p155
 - 12 2 に同じ p158,159
 - 13 2 に同じ p198
 - 14 ロマン・ロラン著 片山俊彦訳 ベートーベンの生涯 2017 年 85 刷 岩波文庫 p25, 26
 - 15 2 に同じ p 205, 207
 - 16 2 に同じ p 210,219,233
 - 17 1 に同じ p148
 - 18 2 に同じ p333
 - 19 2 に同じ p336
 - 20 2 に同じ p341
 - 21 2 に同じ p345
 - 22 2 に同じ p348
 - 23 2 に同じ p351,355
 - 24 2 に同じ p356
 - 25 2 に同じ p359,360
 - 26 2 に同じ p363
 - 27 2 に同じ p368,370,374
 - 28 ウィルヘルム・フォン・レンツ著中野真帆子訳 改訂版パリのヴィルトゥオーゾたち
2016 年 4 月株式会社ハンナ p11
 - 29 <https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/20180319001.html>
 - 30 <https://blog.goo.ne.jp/hirochan1990/e/a3fddb5a36e260c5979cdcbf73c8862>

参考文献

- ジュリエット・アルヴァン著 櫻林仁・貫行子共訳 音楽療法 音楽之友社
加藤浩子著 バッハへの旅 2000 年 6 月 東京書籍
若林健吉著 シューマン 2003 年 6 月 新時代社
久保田慶一著 2018 年問題とこれからの音楽教育 2018 年第 2 版 シナノ印刷株式会社
浅田まり子著 学び舎第 3 号「モーツアルト効果と教育への提案」
2007 年愛知淑徳大学教育学会
浅田まり子著 学び舎第 12 号「シューマンから学ぶ音楽教育」
2017 年愛知淑徳大学教育学会